

シヨスタコービッチ作品指揮 井上道義

ロシア音楽 聴く自由も

ロシアによるウクライナ侵攻は、クラシック音楽界に大きな影を落としている。欧米諸国でロシア音楽を避ける動きが出る中、ソ連時代の作曲家・シヨスタコービッチに精通している指揮者の井上道義は、音楽に関わる人は今こそ歴史に学ぶべきだ、と話す。(松本良一)



「音楽はエモーションナルなだけの存在じゃないんだ」(東京都渋谷区の自宅で)

3月中旬、名古屋フィルハーモニー交響楽団でシヨスタコービッチの交響曲第8番を指揮した。第2次世界大戦中に書かれ、戦争犠牲者にささげられた曲は、暗く悲劇的なトーンに覆われている。「現実の出来事を反映した、重苦しい演奏だったかもしれない」と振り返り、こう続けた。

「戦争は音楽の中だけにとどめなくてはいけない。どんな理由があろうとも、実際に人を殺すなんて最低だ。音楽家はみんなそう思っている」

現実の暴力の前に音楽は

無力だ。キーウ(キエフ)のテレビ塔がロシア軍の攻撃を受けた時、近くにある、ナチス・ドイツにより大量虐殺されたユダヤ人の追悼施設のことを思った。「シヨスタコービッチは交響曲第13番『バビ・ヤール』で、まさにその虐殺を強く非難した。そこを攻撃してどうするんだ」

作曲家は平和を願い、音楽で戦争を告発した。「もし、この曲をロシアの作曲家の作品という理由で演奏会から排除するとしたら、それはあまりに一面的な考えだと思ふ」

しかし、音楽は感情の芸術でもある。「ウクライナの人はいま、『バビ・ヤール』を演奏する気になれないかもしれない。その気持ちにはわかる。だが、音楽を

聴きたい人から、その機会を奪うのは誤りだ」。それが、たとえナポレオン戦争におけるロシアの勝利を祝ったチャイコフスキーの序曲「1812年」であっても、という。

クラシック音楽は再現芸術といわれる。数百年前に起こったことやその時の感情を、時間というプリズムを通して繰り返し参照することができる。「単純な敵・味方ではなく、距離を置いて対象を眺め、体験していないことを知り、複雑な背景に思いをめぐらす」。そこにクラシックの本当の価値がある、と強調する。

6月には九州交響楽団でシヨスタコービッチの作品を再び指揮する。「かつての日本で敵国の音楽・文化が排除されたことがあったことを思い起こしてほしい。目の前の感情に流される前に立ち止まり、時代を超えた芸術作品の価値についてじっくり考えたい」